

ヴィクトリア&アルバート博物館所蔵の 1876年フィラデルフィア万国博覧会に展示された 日本陶磁器コレクションに関する調査について

野口 祐子

序

筆者は昨年度の本学術報告で発表した「研究ノート」において、19世紀後半のイギリスで日本の工芸品に魅せられたコレクター、ジェームズ・ロード・ボウズを取り上げた⁽¹⁾。ボウズは1875年にみずからのコレクションを中心に *Keramic Art of Japan* (Audsley and Bowes 1875) を世に問うたが、これは日本における陶磁器の歴史的・地理的分類を行った蜷川式胤の『観古図説陶器之部』(1876-79)の英語版もまだ世に出ていない時代であり、彼自身の研究と嗜好に大きく依存した内容であった。ボウズの嗜好は一貫して華美な装飾陶磁器にあった。日本陶磁器に関するE・S・モースとの論争から、自説を主張するために執筆した *A Vindication of the Decorated Pottery of Japan* (1891) の中でボウズが述べている点に興味深い。すなわちボウズは、1875年に *Keramic Art of Japan* を出版して以降、突然起こった「非装飾陶磁器」への熱狂が「装飾陶磁器」の正しい理解を阻んでいると指摘する (“the craze for the Undecorated wares which has since then cropped up, is now, both in Europe and Japan, giving place to the right appreciation of the Decorated wares with which it dealt.” Bowes 1891, 15)。ボウズ自身がイギリスのみならずヨーロッパと日本における、彼の言うところの「非装飾陶器」すなわち茶陶への関心の高まりを感じていることがわかる。この「非装飾陶磁器」への熱狂はなぜ起こったのか。

1870年代以降、京都の粟田焼で多く生産された装飾性豊かな輸出用陶器 Satsuma が主にイギリスでどう受容されたかに注目した昨年度の調査では、錦光山を代表とする京薩摩が1900年代から急速に欧米で勢いを失っていく背景には、単に装飾陶磁器が飽きられたというだけではなく、茶陶に代表される日本の陶磁器への理解が進んだことも理由としてあるのではないかと考えるに至った。そして茶陶への理解がイギリスの陶芸に及ぼした影響もあったのではないかと推測した(野口86)。ただし、ボウズが感じた茶陶への関心の高まりについて、1876年に開催されたフィラデルフィア博覧会と、そのコレクションを受け入れたロンドンのサウス・ケンジントン博物館、

そしてその解説を出版した大英博物館のフランスの著作自体の影響に触れてはいるが、ボウズがいう日本製陶磁器受容の変化の原因を解明するには至らなかった。

そこで今年度のイギリスにおける調査では、フィラデルフィア万国博覧会に展示され、サウス・ケンジントン博物館所蔵となった日本陶磁器コレクションの全容に注目することにした。ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館 (Victoria and Albert Museum. 以下 V&A 博物館と表記) は、国内外の美術工芸品を収蔵する世界的な博物館である。1851年の第1回ロンドン万国博覧会の展示品を収蔵した前身のサウス・ケンジントン博物館 (South Kensington Museum) から引き続き、装飾・デザイン分野の博物館として今日までコレクションの充実をはかってきた。V&A 博物館には日本の美術工芸作品も数多く所蔵されている。本稿では、その中で特に1877年にコレクションされたフィラデルフィア博覧会由来の日本陶磁器に注目し、コレクションされるに至る経緯から、当時の日本とイギリスの文化交流の実態を明らかにしたい。

筆者は2017年8月にV&A博物館とその収蔵館 Blythe House で収蔵品の実見調査を行い、併せてV&AのNational Art LibraryとAsian Departmentで館所蔵資料を閲覧する機会を得た⁽²⁾。本稿は主にその調査結果の報告である。

1 サウス・ケンジントン博物館における日本陶磁器収集の意図

今回の調査で注目したのは、1876年のアメリカで開催されたフィラデルフィア万国博覧会に展示された「サウス・ケンジントン博物館所蔵」の日本陶磁器コレクションである。このコレクションが生まれる経緯については、拙稿(2016)で概略を示した。すなわち、イギリス政府から日本博覧会事務局に、展示後にサウス・ケンジントン博物館の所蔵として買い取るので、日本の代表的な陶磁器を古いものから現代のものまで網羅的に収集してほしいという依頼があり、それを受けて日本側は先史時代から始まる陶器の代表例、および日本各地の陶磁器の収集に向けて精力的に動いたと考えられる(野口82)。

このコレクションは当時のイギリスにとって、単に日本の陶磁器の代表的な作品を収集・展示するにとどまらない意義を持つものであった。イギリスに日本陶磁器の全容を網羅するコレクションを形成するについては、その政治的意図が指摘されている。以下、拙稿(2016)から再び概略を引用することをお許しいただきたい。

V&A博物館の東アジアコレクションを歴史的に検証するクルーナス(C. Clunas)は、当時の日本陶磁器収集にはイギリスとアメリカの国威発揚のための競争意識が働いていたとする。フィラデルフィア万国博覧会の展示品をサウス・ケンジントン博物館で買い取るという決定については、以下のように分析される。

Including both modern pieces and some very significant earlier ones (cats. 114-116), the collection serves not only to make manifest the Museum's program of a series of "complete"

taxonomies of the arts, but also to confront Britain's main commercial rival in Japan, the United States, making evident Britain's willingness to spend resources to "acquire" Japan on a symbolic level. (Baker & Richardson 233)

「最近のものから、作品114-116に見られるような重要な古い作品まで含むこのコレクションには、分類上の全容を網羅するコレクションを形成するという博物館の企図だけでなく、日本における貿易上のライバルであるアメリカに対して、イギリスが象徴的に日本を「買い占める」ために金を惜しまない心意気を示す目的もあったのである。」(拙訳)

この後に紹介される作品には、16世紀後半から17世紀に作られた備前焼の水指、本阿弥光悦作とされる黒楽茶碗、野々村仁清の香炉 (cats. 114-116) が含まれる (271-72)。その作品解説によれば、フィラデルフィア万博での展示には、“The Property of the South Kensington Museum” というラベルが貼られ、“This acquisition strategy enabled Britain to assert cultural hegemony over Japan, ahead of America, its rival for power in the East.” (269) 「この収集戦略は、日本における勢力上のライバルであるアメリカに対するイギリスの文化上の優位を誇示した」ということである。19世紀後期は、収集・分類・命名の作業を中心とした博物学がより科学的に進歩した時代であった。陶磁器についても、単に美しいもの、珍しいものを収集するだけでなく、ある地域の陶磁器業について、その発展の歴史を示す作品を網羅的に収集・分類するというコレクションの手法がとられるようになった。それはまたクルーナスの指摘からも明らかのように、知の集積が世界の支配に結びつくという思想的な背景に支えられていた。当時の美術工芸分野で欧米諸国に大いに注目され、重要な影響を与えていた日本の陶磁器作品を網羅的にコレクションすることによって、イギリスは自国の文化力を対外的に示すことをも企図したのである (野口 82-83)。

フィラデルフィア万国博覧会における日本の陶磁器収集については、以上のようなイギリス側の意向があったと考えられるが、サウス・ケンジントン博物館館長であったカンリフ＝オウエン (Cunliffe-Owen) 作成の文書が、そのコレクション形成の思想的背景を裏付けている。以下にカンリフ＝オウエンが日本陶磁器のコレクション形成の必要性を説いて、一括購入を提案している1875年7月付の館内文書の一部をここに引用する。本文書はイギリス国立公文書館 (The National Archives, United Kingdom) に保存されているが、資料の劣化と手書き文書であるため判読困難な箇所があることは了解いただきたい⁽³⁾。

The Museum possesses but few specimens of Japanese pottery and porcelain, and this branch of art is now being much sought after. It seems desirable that means should be taken to secure an historical collections of Japanese pottery. This cannot be done in Europe, and can only be accomplished on the spot and with a knowledge of the history of the various descriptions of pottery known. Moreover, the whole commerce being much under Government control, and that of the provinces entirely so, only some government agency can

accomplish the task of forming such a collection as would be desirable in the museum to illustrate the art of Japanese pottery.

I would recommend that advantage should be taken of the favourable opportunity which is presented at this time, and that M. Sano should be requested to make an historical collection of Porcelain and Pottery from the earliest period until the present time, to be formed in such a way as to give fully the history of the art illustrated by the best specimens which through his influence can be secured from each province. Also that each pottery mark should be carefully drawn and an historical notice given of the details of each particular locality in which porcelain or pottery has been at any time manufactured. The specimens so collected to be exhibited in the Japanese Section of the Philadelphia Exhibition as the property of the South Kensington Museum, and formed by the Japanese Commission. This would ensure the interest of the Japanese, and the advantage of the cooperation of the competent officials of the Government who will be scouring the country for such examples as may be considered desirable for the purposes of the Exhibition. (Board Minutes, South Kensington Museum, No. 3977, 26 Jul. 1875) (下線原文)

「本博物館は日本の陶磁器をわずかししか所蔵していないが、この分野の芸術は今日注目が集まっている。ゆえに日本陶磁器の歴史を網羅するコレクションを確保する手段を取るべきである。これはヨーロッパにおいてなしえるものではなく、現地において、日本陶磁器の歴史的・地理的な専門知識を有する者が収集しなければならない。さらに、陶磁器産業が国・地方の権力の統制下にあるため、政府関係者のみが、本博物館に収蔵するにふさわしい日本陶磁器を歴史的に網羅した代表作のコレクションを形成する役目を実行することができるだろう。

今回の機会を利用して、佐野氏に初期から現代までの陶磁器の歴史的なコレクションを収集してくれるよう頼むのが良策だと考える。佐野氏が影響力を行使して、各地方から最良の代表例を収集して、日本陶磁器の歴史を完璧に網羅するコレクションを形成してもらおう。また、各作品の銘を緻密に描写し、生産された場所と時代に関する歴史的な解説を付ける。このようにして収集された代表例をフィラデルフィア博覧会の日本セクションで展示するに際しては、日本の博覧会事務局に委託して形成された、サウス・ケンジントン博物館の所蔵品として展示する。そうすることは日本の利益にもなるし、日本政府の有能な官僚たちが日本中をくまなく探し回って、博覧会に展示するにふさわしい作品を収集してくれる協力関係も得ることができる。」(拙訳)

この引用箇所にあるように、日本陶磁器の歴史的コレクションをサウス・ケンジントン博物館が保有することが急務であること、イギリスではなく日本側が収集することによって、コレクションのレベルが保証されること、同時に日本との関係も深まるといふ利点が強調されている。これに続けてカンリフ＝オウエンは、日本陶磁器の一括購入に1,000ポンドの予算を確保し、日本側

代表の佐野常民に対して調達資金を250ポンドずつの分割で支払うよう提案している。

I accordingly recommend that an imprest of One Thousand Pounds be placed at the disposal of Excellency Sano, to be drawn in sums of £250, and that he be requested to have this Collections ready for Exhibition in the Japanese Section of the Philadelphia Exhibition to be labeled as indicated, and to be packed and handed over to the Museum authorities at the close of the Exhibition. (同上) (下線原文)

「以上のことを踏まえて、私は佐野氏に1千ポンドの資金を与え、1回に250ポンドずつ支払うこととして、フィラデルフィア万国博覧会の日本セクションに、上記のように本博物館所蔵と明記してコレクションを展示し、博覧会終了後は本博物館に移譲するという条件で、作品収集の依頼を行うことを提案する。」(拙訳)

興味深いのは、カンリフ＝オウエンのこの提案書の下に添えられた、7月21日付の館内委員からのコメントである。手書きで解読困難であるが、一部は“From the art point of view, I think this a most desirable action taking case to direct the purchase only of specimens of the past, other than current examples, which, if introduced at all, should be sparingly.”「芸術の見地から言えば、過去の代表例のみを購入すべきであり、現代のものは購入を絞るべきだと考える。」(拙訳)と読める。当時、欧米向けの輸出用に生産されてイギリスに出回った陶磁器よりもむしろ、歴史的な価値のある日本陶磁器を収集すべきだという考えが見える。

2 収集品の価値についての判断

カンリフ＝オウエンの提案通り、フィラデルフィア万国博覧会に展示された日本陶磁器216点は、博覧会終了後、サウス・ケンジントン博物館のコレクションとなった。それらは今日V&A博物館収蔵品番号160-1877から374-1877までの通し番号と、446-1877によって分類されており、一部消失しているものはあるが、V&Aのデジタル・アーカイブズ“Search the Collections”で検索して画像と簡単な解説を見ることができる⁽⁴⁾。

フィラデルフィア万国博覧会からV&A博物館に収蔵されたコレクションの一例として、京都粟田焼の窯元であった六代錦光山宗兵衛作の台座付き皿(Fruit tazza, 266-1877)を取り上げてみよう[写真1]。これは当時の欧米で人気を誇ったSatsumaの一例と見なすことができる。先にも触れたように、京都の粟田



[写真1 (筆者撮影)]

焼でも多くの Satsuma を生産し、錦光山はその筆頭であった。

2017年8月21日に行った実見調査時に撮影した写真1~3でわかるように、粟田焼独特のクリーム色の地に果実と葉をデザイン化した繊細な装飾が施されており、欧米の食器として通用する絵柄と形である。底には何も記されていない。台座の周囲には「日本京都錦光山造」の金字が確認できた（[写真3]）。見える箇所に製作者名を書き入れるのはいかにも無粋であるが、これが欧米の消費者向けのサンプルとしての役目を果たすという意識で作されたとすれば、その行為も頷ける。

このコレクションには日本陶磁器を歴史的・地理的に網羅する意図があったことを前述したが、実際にはこの粟田焼のような同時代の作品も多く含まれる。ゆえにV&A博物館のルパート・フォークナー氏も指摘する通り、今日目から見れば、歴史的に網羅された、あるいは「本来の」日本陶磁器の価値を反映したもの、とは言い難い点がある（Faulkner 285）。ではこのコレクションにおける作品の評価にはどのような特色が見出せるだろうか？

V&A博物館には、サウス・ケンジントン博物館の所蔵品について、博物館が入手した年月日順に記入した記録が存在する。*List of Objects in the Art Division, South Kensington Museum, Acquired during the Year 1877, Arranged according to the Dates of Acquisition, with Index and Appendix* (1878)では、その12ページから、フィラデルフィア万国博覧会で展示された後、サウス・ケンジントン博物館に入った216点のリストが並ぶ。番号は160-'77から始まり、374-'77までと446-'77が該当する。この番号が現在も踏襲されていることがわかる。この記録には、当時の購入額も記載されているので興味深い⁽⁵⁾。上記の六代錦光山宗兵衛作の台座付き皿（266-1877）の購入価格は1ポンド12シリングとある（*List* 22）。当時の通貨では20シリング=1ポンドであった。コレクション中、最も高値で購入されたのは、古伊万里の大型の蓋付き壺であり（327-1877 [写真4の左側]）、80ポンド13シリングであった。他の購入価格と比べて法外な価格と思われるが、江戸時代を通じて評価の高かった有田焼は、本コレクションでも全般に高値が付いている。細密な装飾が施された陶磁器への評価が高かったことが推測できる。現在ではこの有田焼は [写真4] のように、本コレクションの他の装飾陶磁器と共にV&A博物館の Ceramics,



[写真2 (筆者撮影)]



[写真3 (筆者撮影)]

Room 137室にまとめて展示されており、博覧会当時の評価とは異なる評価がなされていることがうかがえる。

このように細密な技巧をこらした装飾陶磁器の評価が比較的高かったことが窺えるが、本コレクションの特徴は、当時のイギリスでは一般にあまり知られていなかった茶陶もかなり存在する点である。茶入 (tea caddy) が11点、茶碗 (tea bowl) が30点近く、水指等も確認できる。京都に関わりの深い例を挙げれば、楽家歴代の茶碗も収集されている (240-1877, 242-1877, 245-1877, 246-1877)。

ただし、その購入価格からは今日と随分異なる評価がなされたと推測される。茶碗は1ポンド6シリングが最も高く、ほとんどが1ポンド以下で、楽家五代宗入の茶碗 (240-1877) は1ポンド1シリングで購入された。また現在、V&A博物館の所蔵品の中でも評価が高い作品として、先に引用したV&A博物館の作品紹介 (Baker& Richardson 271-72) にも挙げられた備前焼の水指、本阿弥光悦作とされる黒楽茶碗、野々村仁清の香炉があるが、これらの購入価格を見てみよう。まず本阿弥光悦作とされる茶碗 (247-1877) [写真5] は、1877年のリストに“Specimen of ‘Raku’ ware, made by Honnami Koidsu, at Kiôto. Japanese. A.D. 1630.”と記されている。本阿弥光悦作の楽茶碗であることが認識されているにもかかわらず、フィラデルフィア万国博覧会を意識して造られた錦光山の皿が1ポンド12シリングであったのに対して、1ポンド4シリングという、いかにも安値で購入されている (List 20)。茶陶もコレクシ



[写真4 (筆者撮影)]



[写真5 (筆者撮影)]



[写真6 (筆者撮影)]

ョンの中はかなり含まれているとはいえ、装飾陶磁器に比してかなり低価格で購入されたと言える。野々村仁清作とされる法螺貝をかたどった香炉 (260-1877) [写真6手前] の購入価格も、本阿

弥光悦作の楽茶碗と同額の1ポンド4シリングであった。また備前焼の水指（191-1877）の購入価格に至っては9シリングであった。安土桃山時代から江戸時代初期の作とされ、風格のある本作への評価が、当時は低かったものが戦後になって変化したことについて、V&A博物館の認識の変化が以下のように語られている。

The Philadelphia group was in London by the following year, where it was displayed prominently in the Museum's South Court and was featured in subsequent Museum guides, although the tea ceremony ceramics were not specifically singled out. It was not until after World War II that the Museum realized that, for the mere nine shillings paid for this fresh-water jar, it had acquired what is now considered one of the most important objects in the Japanese collection. (Jackson & Faulkner 269)

「フィラデルフィア万国博覧会の陶磁器群は翌年にはロンドンに到着し、博物館の南館の目立つ場所に展示され、後々も博物館のガイドブックで特別に取り上げられたが、茶陶が特別扱いはなされたことはなかった。たったの9シリングで入手したこの水指が、日本コレクションの中でも特に重要な作品の一つであることに博物館が気づいたのは、第二次世界大戦後になってのことであった。」(拙訳)⁽⁶⁾。

カンリフ＝オウエンが提案書で強調したように、また提案書に付されたコメントにもあるように、コレクションは歴史的な視野で収集されるべきものであった。日本側によって実際に収集された陶磁器は、確かに輸出用に当時作られていた陶磁器だけではない。イギリス国内では現物に触れる機会が少なかった茶陶もかなり存在する。しかし購入価格から見る限り、茶陶の評価は装飾陶磁器に比して低かったと言えるだろう。

上で述べた装飾陶磁器と茶陶の購入価格の違いから、当時の日本陶磁器に対するどのようなまなざしが読み取れるだろう。またそのまなざしはイギリスから注がれたものか、コレクションの形成に携わった日本側に一般的であったまなざしを反映しているのか、あるいはイギリスのまなざしを意識した日本側の価値判断が反映しているのだろうか。即答できる問いではないが、幾つか可能性を探ってみたい。

3 茶陶への開眼

フィラデルフィア万国博覧会由来の日本陶磁器コレクションの解説書を編んだフランクスについては拙稿（2016）でも紹介した（83-84）。フランクスは *Japanese Pottery: Being a Native Report with an Introduction and Catalogue* (1880) において、新たにサウス・ケンジントン博物館のコレクションとなった日本陶磁器216点について、産地ごとに分類して1点1点解説している。この冊子が“a Native Report”と呼ばれるのは、日本人による報告を基にしているからであ

る。日本博覧会事務局の塩田真が記し、英語翻訳された解説がV&AのThe National Art Libraryに収蔵されており、実際に今回の調査で一部を実見したところ、全体を比較したわけではないが、フランスの解説が塩田による解説にかなり忠実に依拠していることを確認した。ただし、フランスが“a Native Report”と名づける理由はその事実だけではないだろう。日本人自身による解説を基にしているがゆえに、日本本来の陶磁器を把握する典拠となる解説であることを強調していると考ええる。海外輸出用ではない日本陶磁器の全容を知りたい、コレクションしたいというサウス・ケンジントン博物館の趣旨をくんで日本側が収集したコレクションであること、そのコレクションの真正性が重要であった。

フランスはこの解説書に21ページにわたる詳しいイントロダクションを執筆している。そこで顕著なのは、自らコレクターであったフランス自身が、フィラデルフィア万国博覧会開催の時期に見出した茶陶の重要性であった。その点に関するフランスの言葉をイントロダクションから一部引用する。フランスはイギリス人に馴染みのない茶陶の理解を進めるために、茶道の解説を行っている (Franks 3-7)。彼によれば“The Tea Ceremonies, known as the ‘Cha-no-yu,’ do not appear to have been noticed at any length in any English work” (3) 「「茶の湯」として知られる茶道はイギリス人の著作では十分に触れられていない」状況であり、当時のイギリスでは茶陶の理解が進んでいなかったことがわかる。そんな状況の中、フランス自身は茶陶の美に開眼したことが、次の一節に明らかである。

In fact the Japanese collector, where pottery and porcelain are concerned, cares little for high finish or elaborate ornament; a rough, sketchy, but picturesque design is far more pleasing to him than the elegant forms and rich decoration which we are accustomed to hold in esteem. This explains the notable fact that in none of the collections, formed before the opening of Japan to Western commerce in 1859, do we find any specimens of Japanese pottery, and rarely more than one class of Japanese porcelain, a class made almost entirely for exportation, and which we know as “Old Japan.” (2-3)

「実際、日本の収集家は陶磁器に関する限り、仕上げの入念さや装飾性などには頓着せず、私たちが通常高く評価する優雅な形状や豊かな装飾よりも、肌理の粗い、大雑把な、しかし趣のあるデザインの方を、ずっと魅力的だと感じるのである。これが1859年における日本の西欧との貿易開始より前に形成された [西欧の] コレクションに本来の日本陶磁器がないことの大きな理由であり、“Old Japan” の名で知られている、ほとんどすべて輸出用に作られた磁器の類しか見られない理由なのである。」(拙訳)

ここでいう“Old Japan”とは、先ほど紹介したフィラデルフィア万国博覧会からのコレクションで最高値がついた古伊万里 (327-1877) のような、江戸時代からヨーロッパで人気が高かった装飾性豊かな有田焼のことである。フランスのような学究的コレクターには、万国博覧会の展示

品を通じて、Old Japan や Satsuma だけではない、日本の陶磁器の多様性が認識され、特に輸出品ではなかった茶陶や日用品に対して新たな関心が生まれたことが読み取れる。

ここでフランスの説明に使われた「デザイン」という語に注目したい。これは茶陶を、そのデザイン性において評価する言説である。19世紀末イギリスのデザイン革命を主導した立役者で、V&A 博物館の収蔵品の充実にも深く関わった工芸家・デザイナーのクリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser) も、いち早く同様の指摘を行っている。彼は日本の工芸や建築のシンプルな造形美を自らのデザインに取り入れ、イギリスの工芸・建築にも応用するよう促した (Halén 33-66)。ドレッサーは 1876 年にフィラデルフィア万国博覧会を訪れた後、建築・工芸を自分の目で観察するために日本を訪れたが、それ以前の 1873 年に発表した *Principles of Decorative Design* でも、以下のように日本の茶陶が持つ美に注目している。

As a rule, however, we over-estimate the value of finish, and under-value bold art-effects. Excessive finish often (but by no means always) destroys art-effect. I have before me some specimens of Japanese earthenware, which are formed of a coarse dark brown clay, and are to a great extent without that finish which most Europeans appear so much to value, yet these are artistic and beautiful. In the case of cheap goods we spend time in getting smoothness of surface, while the Japanese devote it to the production of an art-effect. We get finish without art, they prefer art without finish. (Dresser 120)

「一般に私たちは表面の技巧を重視しすぎて、大胆な芸術的効果を過小評価している。過剰な装飾は（常にとまでは言わないが）往々にして芸術的効果を損なう。今、私の目の前には、肌理の粗い濃い茶色の土で作られた日本の陶器がある。それはほとんどのヨーロッパ人が評価するような仕上げの装飾を帯びていないが、これらは芸術的で美しい。安い品についても、私たちは表面のなめらかさを追求するが、日本人は芸術的効果を生み出すことに時間を使う。私たちは芸術を捨てて表面の仕上げを手に入れ、彼らは表面の技巧より芸術を求める。」(拙訳)

以上のように、1876年当時のイギリスにおいて、一般の関心は日本から輸出された装飾陶磁器に傾き続ける状況であったが、フランスやドレッサーといった収集家やデザイナーの目は茶陶の価値に開き始めていたことがわかる。

なお、フランスが編んだフィラデルフィア万国博覧会由来の日本陶磁器カタログは、先述したように日本側が作成した解説文を基にしている。V&A の The National Art Library が所蔵する 'Report on Japanese ceramics with reference to the exhibits at the 1876 Philadelphia Exhibition [manuscript]' / M. Shioda (National Art Library (Great Britain). Manuscript. MSL/1884/2798) である。85葉からなる手書き文書は、日本側の博覧会事務局の塩田真の名で作成され、T. Asami によって英語に翻訳されている。この文書に関する調査は今回は十分にできていない。塩田真はフィラデルフィア万国博覧会に向けて博覧会事務局主導で作成した図案集『温知図録』に関わっ

た事務官のひとりであり(横溝 152)、1873年のウィーン万国博覧会においては審査官を務めた(柏木 171)、日本の近代工芸の発展と海外進出に寄与した人物と目される。『温知図録』に収録された図案は欧米の人々が日本的と思う装飾過多な図案が主流であり、茶陶とは異なる陶磁器の輸出戦略が図られていたことが確認できる。塩田はまた、1876年末から1877年にかけて日本の工芸と建築を見る旅をしたドレッサーの相談役を務めた(Halén 42)。

4 日本における茶の湯の凋落と復活

1870年代後半から1880年代のイギリスにおいて茶陶への評価が変化していった可能性について、もう一つの手がかりは日本国内にある。それは茶の湯の凋落と復活という、当時の日本における状況である。明治維新後の社会では伝統文化が軽んじられ、熊倉氏の言を借りれば「茶の湯を楽しむのは一部の武士と上層の町人だったから、その人々が維新で打撃を受けると、にわかに没落してしまったのである」(熊倉 16)。そのため茶道具の価格も下落した。また「下落したのは茶の湯の道具で、煎茶道具は人気があった。明治の高官たちの間では煎茶が流行したからだ」(熊倉 17)と指摘される。このような明治時代初期の社会状況と茶道に関わる人々の大きな変化が、サウス・ケンジントン博物館の購入価格にも影響していると考えられる。これは日本国内の評価が反映した側面である。

茶の湯は明治維新後の社会が安定するにしたがって、新しい担い手を得るようになる。江戸時代までは主に男性のものであった茶の湯が女子教育の場に取り入れられ、女性が嗜むようになるのも同時期である(茶道資料館 22-50; 69-74、神津 262-263)。新しく権力の座についた政界人や新興財界人による茶道具の収集も同時期に始まり、近代数寄者の形成につながる。神津(2009)から引用する。

明治初頭の約二十年間に、煎茶道具の高騰とは対照的に、買い手のつかない茶道具の値段は暴落した。この時期には廃仏毀釈で荒廃した寺院からは仏教美術品が、旧大名家などからは調度品が安値で流出し、日本美術を評価した外国人に買われて国外に出ることも多かったが、幸いというべきか、茶道具は外国にさえまったく売れなかった。(中略)

茶道がそうしたどん底から抜け出したのは、一般的には、国粋主義的風潮のなかで伝統文化が見直されたことと、新政府の高官や政府と結びついた新興財界人が美術品の購入をはじめ、茶の湯に関心を持つようになったことがあげられている。それがはっきりするのは明治三十年代になってからのことだが、茶道は明治十年代後半にはすでに復興しつつあった。(神津 258-259)

このように、茶の湯の凋落と復活には、当時の日本国内の社会情勢と社会の風潮が密接に関わった。それだけでなく、何が日本的か、という国際社会の中で日本のアイデンティティをどう示す

かという意識も反映していたと考える。茶陶の価値は、このような社会情勢と思想の大きな変動の中で激しく変化したものといえる。

まとめ

以上のことから、本報告の冒頭で提示した、ボウズがいうところの「突然の「非装飾陶磁器」への熱狂」という現象は、実際には「熱狂」というほど激しくも広範なものでもなかったが、フィラデルフィア万国博覧会があった1876年から10年あまりの期間は、確かにイギリスにおいても日本においても、茶陶への評価が大きく変化する時代であったことがわかる。輸出用ではないためにそれまで目にする機会が少なかった茶陶の美を、イギリスにおいて一部のコレクターやデザイナーが見出し始めたのが1870年代中盤から1880年代であった。イギリスにおける茶陶の理解の深化にはフィラデルフィア博覧会において日本陶磁器の歴史的なコレクションの形成を企画したサウス・ケンジントン博物館が一定の役割を果たしたといえる。また日本国内の事情も当時の茶陶の価値に大きく影響したと考えられる。

拙稿(2016)で「ボウズがコレクションを形成した1867年から1874年という時代を過ぎてから、欧米における日本陶磁器の歴史と産地の全容についての理解が進んだのは、ボウズ・コレクションにとっては皮肉な成り行きであったと言わねばならない」(86)と述べたように、日本陶磁器コレクターの先駆者であるという自負を抱いていたボウズにとって、自分には美しいと思えない茶陶を高く評価する言説が現れたことは、彼のコレクションの価値への挑戦であった。まさにボウズ・コレクションの形成後に、輸出用陶磁器が日本陶磁器の特徴を示すものではないという認識がイギリスで広がり、日本陶磁器の全貌を理解したいという機運が興ったのである。その機運を具体化するために、サウス・ケンジントン博物館主導で、博物学的アプローチによって、歴史的・地理的分類に基づく日本陶磁器コレクションがはじめて誕生した。欧米でジャポニスムの流行が続いていた時代は、同時に博物学的な見地からは客観的な収集・分類と、ものの真正性が求められた時代でもあった。そのような収集方針のもとに集められた日本陶磁器コレクションが、茶の湯と茶陶をイギリスに紹介する役割を果たし、その理解を促す足がかりとなったと考えられる。

このように、日本陶磁器、とりわけ京都産陶磁器のイギリスにおける受容と相互影響というテーマについては、イギリスでの受容に関する調査・研究と日本国内の状況に関する調査・研究を合わせて行う必要があり、その往還から新たな知見を見出すことが引き続き本研究の課題である。

〔付記〕 本稿は、科学研究費基盤研究(C)「明治時代京都の工芸とそのイギリスにおける受容と相互影響に関する研究」(平成28~30年度、課題番号16K02274、研究代表者：野口祐子)の研究成果の一部として発表するものである。

本稿を執筆するにあたっては、V&A博物館と、本科研助成事業の研究協力者であり同館の

Senior Curator である Gregory Irvine 氏の協力を得た。館所蔵資料の閲覧と所蔵作品の実見調査を可能にくださった V&A 博物館と、多くのご教示をいただいた Gregory Irvine 氏、V&A での実見調査に協力いただいた Louise Cooling 氏に感謝いたします。

また研究協力者である京都府立京都学・歴史館の松田万智子氏には、吉田光邦文庫をはじめとする館所蔵資料について多くのご教示をいただいたことを感謝します。

(注)

- (1) 野口祐子「ヴィクトリア朝後期イギリスの日本陶磁器ブームにおける Satsuma 受容の様態—ジェームズ・ロード・ボウズの著作を中心に」『京都府立大学学術報告 人文』第 68 号 (2016) 73-88.
- (2) 資料の閲覧と実見調査には、研究協力者である V&A アジア部門日本担当 Senior Curator の Gregory Irvine 氏の協力を得た。
- (3) Board Minutes, South Kensington Museum, No. 3977, 26 July, 1875. The National Archives, United Kingdom.
- (4) 例えば、V&A Search the Collections の検索画面に 160-1877 と入力すると、フィラデルフィア万国博覧会由来のコレクションの筆頭である “Jar, final Jomon ware” の画像と博物館の収蔵場所および作品解説を見ることができる。<https://collections.vam.ac.uk/item/O496428/jar-unknown/>
- (5) なお、イギリス政府がコレクションの購入において実際に支払った額については、600 ポンド、あるいは 600 ポンドから 55 ポンド 11 シリング値引きされた額とも読める資料がある。“Central Inventory for 160-374 and 446-1877” (文書番号 213) では、手書きで以下のように読める。

“The Japanese Pottery, nos. 160-374 and 446 constitutes a Collection made by order of the Japanese Government at the suggestion and request of the Lords of the Committee of Council on Education. It was exhibited at the Philadelphia Exhibition, 1876.
The Collection cost £600.

Mem. £55. 11. 0 having been subsequently returned to the Depart^t, at the unexpected portion of the £600, the respective prices have now been reduced proportionately. C. H [不明]. Derby 18/2/78”

「日本陶磁器 160-374 および 446-1877 はイギリスの教育委員会の提案と依頼を受けた日本政府の命によって収集され、1876 年のフィラデルフィア万国博覧会で展示された。

コレクションの価格 600 ポンド

メモ 個々の品の価格が値引きされたため、600 ポンドのうち 55 ポンド 11 シリングは、後に不要として当局に返還された。C. H [不明]. Derby 18/2/78」(拙訳)

この文書をどう扱うべきかについては、筆者の今回の調査では解明できていない。

- (6) この点については V&A の Search the Collections における作品解説でも触れている。

<https://collections.vam.ac.uk/item/O70480/fresh-water-jar-unknown/>

[引用・参考文献]

Audsley, George Ashdown, and James Lord Bowes. *Keramic Art of Japan*. Vol. 1 & 2. Liverpool & London:

Henry Sotheran. 1875. 糸和沙編『ジェームズ・ロード・ボウズ日本美術工芸関連著作集成』第 5 巻。

Baker, Malcolm, and Brenda Richardson eds. *A Grand Design: The Art of the Victoria and Albert Museum*. New York: Harry N. Abrams, 1997.

Board Minutes, South Kensington Museum, No. 3977, 26 July, 1875. The National Archives, United

- Kingdom.
- Bowes, James Lord. *Japanese Pottery, with Notes Describing the Thoughts and Subjects Employed in Its Decoration and Illustrations from Examples in The Bowes Collection*. Liverpool: Edward Howell, 1890. 糸和沙編『ジェームズ・ロード・ボウズ日本美術工芸関連著作集成』第4巻。
- . *A Vindication of the Decorated Pottery of Japan*. Printed for Private Circulation. 1891. 糸和沙編『ジェームズ・ロード・ボウズ日本美術工芸関連著作集成』第1巻所収。
- Clunas, Craig. 'The Imperial Collections: East Asian Art' in Baker & Richardson, 230-36.
- Dresser, Christopher. *Principles of Decorative Design*. London: Cassell, Petter & Galpin, 1873.
https://ia801406.us.archive.org/11/items/principlesofdeco00dres/principlesofdeco00dres_bw.pdf
- Faulkner, Rupert. "Japanese Tea Ceramics in the V&A: Acquisitions of 1877." *The V&A Album* 4. London: De Montfort, 1985, 284-288.
- Franks, Augustus W. *Japanese Pottery: Being a Native Report, with an Introduction and Catalogue*. London: Chapman, 1880. Rpt. London: Forgotten Books, 2015.
- Halén, Widar. *Christopher Dresser: a Pioneer of Modern Design*. Chap. 2: "Cult of Japan," 33-66. London: Phaidon, 1993.
- Jackson, Anna, and Rupert Faulkner. "Japanese Fresh-Water Jar with Lug Handles." Baker and Richardson, 269.
- Shioda, M. 'Report on Japanese ceramics with reference to the exhibits at the 1876 Philadelphia Exhibition'. National Art Library (Great Britain). Manuscript. MSL/1884/2798.
- South Kensington Museum, ed. *List of Objects in the Art Division, South Kensington Museum, Acquired during the Year 1877, Arranged according to the Dates of Acquisition, with Index and Appendix*. 1878.
- Victoria and Albert Museum, Search the Collections. Internet Archive. <https://collections.vam.ac.uk>
- 柏木加代子「柴田是真と京文化」稲賀繁美編『伝統工芸再考 京のうちそと一過去発掘・現状分析・将来展望—』思文閣出版、2007、163-183。
- 熊倉功夫『近代数寄者の茶の湯』河原書店、1997。
- 神津朝夫『茶の湯の歴史』角川選書、角川学芸出版、2009。
- 茶道資料館編『平成27年春季展 錦絵にみる茶の湯—今日庵文庫所蔵明治期の作品を中心に—』茶道資料館、2015。
- 東京国立博物館編『明治デザインの誕生—調査研究報告書「温知図録」—』国書刊行会、1997。
- 蜷川式胤『観古圖説陶器之部』(1876-79)。小野賢一郎編、復刻版全4巻。陶器全集刊行会、1934-35。
- 野口祐子「ヴィクトリア朝後期イギリスの日本陶磁器ブームにおける Satsuma 受容の様態—ジェームズ・ロード・ボウズの著作を中心に—」『京都府立大学学術報告 人文』第68号(2016)73-88。
- 樋田豊次郎『明治の輸出工芸図案』京都書院アーツコレクション、1998。
- 横溝廣子「明治政府と伝統芸術—『温知図録』から明治宮殿「千種の間天井画」へ—」稲賀繁美編『伝統工芸再考 京のうちそと一過去発掘・現状分析・将来展望—』思文閣出版、2007、150-162。

(2017年10月2日受理)

(のぐち ゆうこ 文学部欧米言語文化学科教授)